

古墳出土の曲げられた鉄器について

— 同志社大学所蔵西山2号墳出土鉄剣の観察から —

門 田 誠 一

〔抄 録〕

弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした時期の墳墓から出土する鉄製武器や農具のなかには、明らかに人為的に折り曲げられたとみられる依存状態を示す遺物がある。この種の鉄器は日本列島では、すでに100を超える例が知られているが、同様の類例は朝鮮三国時代および中国東北部の北方民族の墓からも出土する。本論ではこのような鉄器について、実際に観察しえた資料を端緒として、東アジアの主な類例を対照検討しつつ、そのような習俗の意味を考察した。結論として、広範な地域に同様の習俗が存在することから、広域に展開した体系的な信仰習俗に基づくものと推定した。

キーワード 鉄器、弥生時代、古墳時代、儀礼、東アジア

はじめに

古墳から出土する鉄器のなかに人為的に曲げられた例があることは、近年、とみに注目されており、専論も提示され始めている。また、韓国における三国時代墳墓から同様の資料が報じられており、さらに中国東北部の扶余ないし鮮卑が残した遺跡からも同種の遺物が発見されている。

筆者も人為的に曲げられたり、あるいは損壊された鉄器や土器について、東アジアの事例に関心をもつにいたったが、時に際して、平成15年度10月1日から3月31日までの六ヶ月間、同志社大学歴史資料館に研修員として受け入れを許可され、同館所蔵の考古資料について、観察、写真撮影、実測などの便宜を図っていただいた。今回、観察した対象は主として古墳時代を中心とし、とりわけ、朝鮮半島や中国などで類品が出土していたり、あるいは系譜や淵源が求められる遺物に焦点をしばって実査を行った。とくに、同志社大学名誉教授である森浩一氏が十代の終わりから、半世紀以上をかけて、発掘あるいは収集した資料群のなかには、現在、消滅した遺跡や古墳から出土し、または収集した遺物が多く、そのほとんどが現在の考古学にとって重要かつ貴重な資料となっている。

このような意味をもつ同志社大学歴史資料館所蔵の森浩一資料は整理箱にして数十箱にも及び、そのすべてに論及することは筆者の能力の及ぶところではない。ただ、そのなかに筆者が強い関心を抱く、東アジアの交渉や交流の考究に裨益するところの大きい資料が数多く存在し、その一つとして、人為的に曲げられた鉄器が存在する。その資料は、西山2号墳から出土した鉄剣であり、銹化した現資料を損なうことのないよう注意しつつ、観察と熟覧を行った。本論ではその知見を簡略に述べるとともに、近年、蓄積しつつある日本列島出土の資料に加えて、韓国出土資料と中国の類例を瞥見とすることによって、東アジアにおける人為的に曲げられた鉄器のもつ意味を明らかにする端緒としたい。

1. 西山2号墳出土の曲げられた鉄剣

西山古墳群は全長約180mの前方後円墳である車塚古墳を中心とする久津川古墳群の東北約500mに位置し、行政区域としては京都府城陽市にする南北方向に延びた低丘陵上に所在したが、住宅団地造成に伴い消滅した。古墳群は7基からなり、これらのうち1、2、4、5号墳に対して1961年に発掘調査が行われ、その成果が報告されている⁽¹⁾。

調査された古墳のなかで、西山2号墳は、古墳群のなかでは、北寄りの丘陵麓にあった古墳時代前期後半の古墳で、墳丘は南北約27m・東西約25m・高さ4m前後の方墳である。埋葬施設としては、ほぼ南北方向に大小4基の木棺の存在が確認された。

出土遺物のうちで、しばしばとりあげられるのが、三角縁神獣鏡であり、これは4基の木棺のなかでは最初に構築された中央棺の副葬品である。この鏡は「陳是作竟」の銘文をもち、天理市の黒塚古墳出土鏡の一面と同型鏡として、その後、再び注目されることとなった。西山2号墳の出土遺物としては、これらの銅鏡類に関心が集まる傾向があるが、その他にも、中央槨からは鉄斧、鉄製ヤリガンナ、スキ・クワ先状鉄器など、東槨では銅鏃、鉄剣、板状（報告では短冊形）鉄斧、刀子、靱などが出土した。また、西槨からは、石釧とともに四獣鏡が出土している。南槨では木棺に施された赤色顔料（報告書では朱とする）のみが認められ、出土遺物は知られていない。

これらの出土遺物のうち、その後の各地の古墳や弥生時代墳墓の調査のなかで、類例が知られ、重要性が喚起された遺物として、鉄製武器や農工具のなかで、身の部分あるいは柄の部分が故意に曲げられた資料がある。西山2号墳出土遺物のなかにも、このような例があり、この資料は他の出土遺物とともに、同志社大学歴史資料館に所蔵されている。

問題の曲げられた鉄剣は西山2号墳東槨の粘土槨を破壊した盗掘孔の中から発見された⁽²⁾。原資料には「西山古墳」の表示とともに「61.7.4 剣W1 NYS-2 槨1 盗掘孔より」の表示のあるカードが添えられている。記載のうち、「61.7.4」は出土した年月日である1961年7月4日を指し、「NYS-2」は西山2号墳を示し、「槨1 盗掘孔より」は出土した埋葬



図1 西山2号墳東槲出土鉄剣

施設と出土位置と状態を指し示しており、報文にある鉄剣であることが確認される(図1)。鉄剣は全体に錆化が進んでいるため、資料の保全を第一に考え、今回は熟覧と観察および簡略な法量の測定のみにとどめたが、形態の依存は完好であり、鏑は明瞭である。曲がった状態での全長は18.2cmであるが、復元長を測定したところ27.6cmほどになる。身部の最大幅は2.7cmであり、茎の端部の幅は1.2cmである。切先側から、身の三分の一程度の部分で急激に曲げられており、側面から見ると鉤状を呈する。曲げられた部分は直角に近い鋭角をなし、仔細に観察すると、この部分に硬い木材などを当てて、急激に力を加え、一回で曲げたことが看取される(図1)。曲げられた角度からみると、おそらく角材状のものを用いて曲げたと推測され、その有様からみて、極めて手馴れた様子が伺える。この資料を熟覧し、観察することを契機として、古墳時代に行われた鉄器を人的に折り曲げるという行為について、改めて関心をもつにいたったことから、次項以下で東アジア地域を含めて、類例と諸見解を瞥見していきたい。

2. 曲げられた鉄器に関する諸説

このように主として鉄器を曲げて、埋葬施設に埋納した例は、近年、類例が増加している。これについて、石野博信氏は葛城地域の石光山古墳群(奈良県御所市)から出土した例をあげて、刀剣の持つ呪力を否定するものと考えた⁽³⁾。その後、同様な埋納例のなかで、時期的にさかのぼるものとして、妻木・晩田遺跡群の松屋頭1号墳(鳥取県大山町・淀江町)では柄の

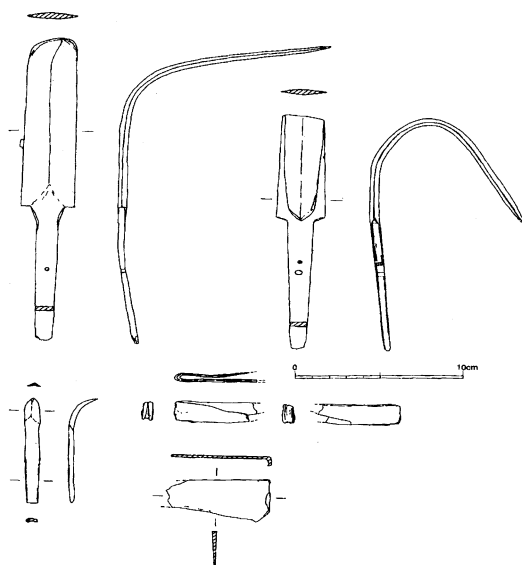


図2 道上5号墳出土鉄器類

部分を円形に折り曲げた鉄製ヤリガンナが出土しており、所属時期は弥生時代終末頃とみられる⁽⁴⁾。

また、道上墳墓群（広島県神辺町）では、古墳時代前期に属すとされる5号墳から出土した鉄剣2振、刀子、ヤリガンナが折り曲げられており、一基の埋葬施設から複数個体の折り曲げられた鉄器が出土した例として注目される⁽⁵⁾（図2）。

古墳時代に入ると、曲げられた鉄器の類例は増加し、地域ごとの集成と検討が加えられている。そのなかで、管見の限りでは、北部九州地域出土例と丹波地域出土例を集成した専論がある。

北部九州地域を中心として、西日本に出土の曲げられた鉄器について、主要な例を紹介した佐々木隆彦氏はそれらが墳墓に埋納される時期が弥生後期後半頃から古墳時代前期を中心とする時期に限定されることを指摘した。また、鉄器の種類としては、鉄剣・ヤリガンナが多いことを示した⁽⁶⁾。

また、長谷川達氏は丹後地域と丹波北部地域における曲げられた鉄器や故意に破碎された鏡、さらに緒を頸飾りなどに用いられた玉類の緒を切られた例について類例を集めた。それによるこれらの地域では、11遺跡12例にのぼり、そのうちわけは曲げられた鉄器が6例、破碎された鏡が4例（1例は曲げられた鉄器と伴出）、緒を切られた頸飾りが3例（1例は破碎された鏡と伴出）であった。このような出土例は古墳時代前期を中心とし、古墳時代を表徴する葬送行為であると位置づけた。また、氏は中国・四国における類例について、26例を集成してい

る⁽⁷⁾。

丹後地域の特徴的な類例としては、古墳時代前期に属すとみられる大田南2号墳から、画文帯神獸鏡とともに、ヤリガンナの可能性が指摘されている「U」字形に折り曲げられた細い板状の鉄板と鈍角に曲がった鉄剣が出土している⁽⁸⁾。報告書では鉄剣が人為的に曲げられたことに対しては慎重に論じているが、「U」字形に折り曲げられた鉄製品との伴出から考えて、人為的に折り曲げたとみてよかろう。

清家章氏は折り曲げた鉄器について、これらの先行研究を基本として、出現から消滅の時期について、弥生時代後期に出現し、弥生時代終末から古墳時代前期にかけて盛んに行われ、中期以降にもわずかに残存することを確認した。また、分布については、西日本一円と東は関東までであるが、東海地域以東は散在的な分布をみるのみであるとする。各時期に若干の差異が認められ、とくに弥生時代後期から古墳時代前期初頭までは近畿地方中心部には類例がなく、折り曲げ鉄器の分布の中心が近畿地方中心部ではないことを指摘した。また、このような行為の意味については、『列仙伝』を中心とした中国の文献を引いて、道教思想に基づき、鏡に代わる器物と推定した⁽⁹⁾。

田中謙氏も、西日本の類例を集成しており、加えて、それらの中には折られる類型と曲げられる類型が存在することを論じている⁽¹⁰⁾。

これらの集成を総括した上で、本稿でふれた筆者が知る例を加えると、鉄器を曲げて副葬した例は弥生時代後期後半から古墳時代前期を中心とし、関東地域から九州中部まで、100例を超える。もちろん、これは類例を知るための作業過程に過ぎず、これらは集成の網にかかった一部であり、この他にも多くの例があるであろうが、時期的な集中と地域的な把握には一応の目安となる。

このように日本列島では弥生時代後期でも、その後半から、鉄器を故意に曲げて副葬する習俗がみられるようになり、とくに古墳時代前期にいたって、関東から九州という広い範囲で、鉄剣や鉄刀を中心とした鉄製武器や鉋をはじめとした鉄製工具などを折り曲げて副葬する習俗があったことが知られる。

3. 韓国・中国における類似資料

近年では韓国でも折り曲げられた鉄器の類例が報告されている。加耶地域では金海・大成洞45号墳でU字形に曲げられた環頭大刀が、他の鉄器類とともにまとめと埋納されていた(図3)。報告書では3世紀前半の築造とされる⁽¹¹⁾。管見の限りでは、この資料が曲げられた副葬鉄器として韓国において、もっとも時期的にさかのぼる例と考えている。

百濟地域では、4世紀中半から末頃にかけて築造されたと報告されている龍院里古墳群のなかの105号土墳墓でも出土しており、故意に曲げられたものと報告されている(図4)⁽¹²⁾。



図3 金海・大成洞45号墳頭大刀出土状態

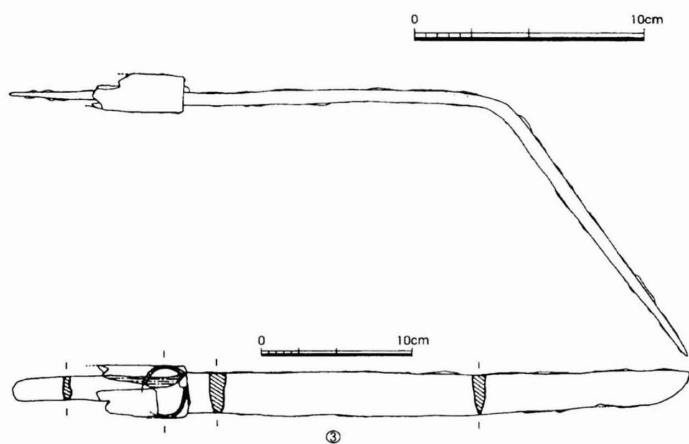


図4 天安・龍院里105号土墳墓出土環頭大刀

また、鉄器を折り曲げることを敷衍して、実用品を故意に損壊して使用不能にするという点を重視すれば、墳墓に埋納する際に土器を故意に打ち欠くという習俗があったことも注目される。

土器を打ち欠いた遺品として、よく知られるのは古新羅古墳における類例である。たとえば、

慶州・天馬塚の副葬槨から出土した有蓋短頸壺の蓋に付けられたつまみが打ち欠かれた状態で埋納されていた。そして、このつまみが失われた蓋とされる土器は、実際には台脚の脚を欠いたものを倒置して用いたものと考えられる。同じく天馬塚では有蓋横瓶にも、つまみを打ち欠いた蓋が用いられていた。天馬塚の有蓋短頸壺や有蓋横瓶には内部に卵殻の入れられた個体があり、祭祀行為に用いられたことは明らかである⁽¹³⁾。また、脚部を打ち欠いた高环形器台の身の部分を鉄釜の蓋とした例が、慶州・皇吾里第33号墳（東槨主槨）⁽¹⁴⁾や皇南大塚北墳⁽¹⁵⁾などの古新羅の古墳から出土している。

この他にも、天馬塚、味鄒王陵地区、仁旺洞、月城路などの墳墓で主として高坏や台付壺などの脚を意図的に欠いている例が報告されており、古新羅の墳墓において、土器を故意に損壊して埋納する行為が存在したことが知られる⁽¹⁶⁾。これらは新羅墳墓における葬送に関わる祭祀行為を示していると考えられる。

このような土器の意図的な破碎と埋納は釜山・金海・昌原・咸安・昌寧・陝川・高靈・慶山・大邱・漆谷・安東・盈徳・浦項などでもみられるとされ⁽¹⁷⁾、新羅・加耶地域の広い範囲で行われた可能性が考えられる。

また、百済においても、漢城期百済の王城と考えられる風納土城の中の祭祀遺構である慶堂地区9号遺構では口縁部が意図的に打ち欠かれた土器が出土している⁽¹⁸⁾。同様の土器は龍仁・水石里遺跡、公州汾江・楮石里遺跡やソウル・夢村土城などの百済遺跡でも確認されている⁽¹⁹⁾。

土器の意図的な破碎後の使用も、鉄製武器や工具などを曲げる行為と相通ずる意味をもつと考えるならば、三国時代において、器物を意図的に損壊する祭祀行為は加耶、百済、新羅と地域を越えて行われていた埋葬習俗であったことがわかる。

このように意図的に土器の一部を破壊する行為の意味については、はやく1970年代に埋葬に伴う習俗と示唆されているが⁽²⁰⁾、具体的な言及は少なく、尹世英氏が「破壊土器」として分類し、特に皇南大塚北墳出土の資料に対しては、葬礼に際して呪術的な目的で破壊され、供献、埋納されたと論じている⁽²¹⁾。

土器を人為的に打ち欠いて副葬する例は中国東北部の墳墓でもみられることが指摘されている。すなわち、鏡を割って墳墓に埋納したり、土器を故意に打ち欠いて埋納する例である。

曲げられた鉄刀の例としては、楡樹・老河深遺跡（吉林省）から出土した武器や利器、工具などがあげられる。具体的な鉄器の種類としては、中層で検出された土壌木棺墓から出土した鉄刀（35号墓、57号墓、67号墓など）、小鉄刀（7号墓などから出土）、鉄錐がある（図5）。これらのうち、鉄刀と小鉄刀は日本の用語では素環頭大刀ないし素環頭刀子に該当する。また、鉄錐は12基の墓から出土しているが、そのうち11基から出土した例が身をほぼ90度の角度に故意に曲げられており、報告書では鉄刀や小鉄刀を曲げるのと同様の葬送習俗と関係するとみている⁽²²⁾。

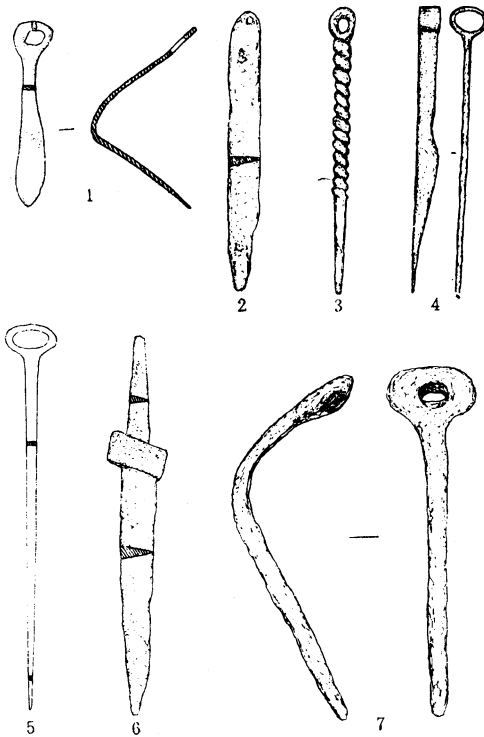


図5 吉林・楡樹老河深遺跡出土鉄器類 1と7が折り曲げられている
縮尺：1は3/1 7は3/2
1 鉄刀（7号墓出土） 7 鉄錘（35号墓出土）



図6 百舌鳥大塚山古墳後円部4号 木槨出土鉄器の推定復元案（宮川紗案）

老河深遺跡の中層で検出された墳墓の年代について、報告書では前漢末から後漢初め頃とし、これらを残した集団については鮮卑であると論じている。ただし、この地域は当該の時期には鮮卑と扶余の領域の境界にあったとされ、扶余の残した遺跡であるとする論者もある。いずれにしても、中国東北地域における漢民族以外の集団が行っていた習俗として注目される。

また、張英氏は鉄製武器や利器を曲げて墳墓に埋納する行為の系譜についても論及している。すなわち、氏は西団山遺跡、永吉・紅旗東梁崗遺跡、両半山石棺墓などの新石器時代の遺跡から出土する鼎形土器のなかに故意に脚部を打ち欠いているものがあり、これを中国東北地域に

みられる「毀器習俗」すなわち器物を意図的に損壊する風習の淵源と位置づけ、それが青銅器時代から老河深遺跡を経て、渤海時代にまで連綿と続く習俗であると考えた⁽²³⁾。

このような考え方は、新石器時代から渤海まで、大きく隔たった年代的広がりとその間の民族やエスニック・グループなどの違いや変化をどのように整合的に説明できるかという点で問題が多いと思われる。

日本の曲げられた鉄器と年代的に対照すべき事例としては、この楡樹・老河深遺跡の他に高句麗古墳出土例があげられる。それは吉林省集安市の禹山下41号墳から出土した鉄矛であり、関の部分から直角に曲げられている。これに対し、張英氏はやはり意図的に曲げられた鉄器と理解しているが、日本の百舌鳥大塚山古墳から出土した類似の遺物に対する考察で、これを鉄製武器の類型として認識する見解もある⁽²⁴⁾ (図6)。

日本列島や朝鮮半島南部において知られている鉄器を曲げて副葬する習俗がはたして中国東北部の扶余や鮮卑の墳墓に認められる例と関係するのかどうかは、未だ空間的な出土遺跡の分布と時間的な連続を証すべき資料が必要だが、東アジアにおいて、少なくともおよそ紀元前後から5世紀頃まで行われていた特色ある埋葬習俗であることは看取されよう。

4. 鉄器を折り曲げる行為の意味

西山2号墳出土の曲げられた鉄剣についての観察から、日本と韓国、中国における同様の類例の一端を示すことによって、東アジアの諸地域には鉄器を故意に曲げて副葬する例が知られることを瞥見してきた。

そして、現時点におけるそれらについての言及を摘要しながら、東アジアにおける類例を拾遺したが、とくに中国、朝鮮半島において、その分布が地域相の面からも点的でありすぎることからみても、今後、類例が増加していくことは間違いない。また、日本列島においても、今後のさらなる集成的研究によって、統計的な類例の検討がなされることになるだろう。

このような習俗が、現在知られている資料として、時期的に早いものとみられている中国東北部の鮮卑・扶余系の墳墓から出土する例を淵源として広まったものかどうかについての論及は、各地の資料の蓄積をまつほかはないが、現時点の論点をいくつかあげて、まとめにかえたい。

その一つは金海・大成洞遺跡出土例の評価である。曲げられた環頭大刀が出土した45号墳からは瓦質土器が出土しているが、時期的にはそれより遅れる陶質土器が出土している29号墳からは銅鏡が出土している。これは中国北方地域から搬入されたものと考えられている。そして、報告者の申敬澈氏は、このような北方系文物の移入や木槨墓や殉葬などに示される新たな墓制と葬送習俗の開始は、3世紀末における扶余の移住が契機となっていると断じた⁽²⁵⁾。

このような地域集団の交代があったかどうかについては、韓国の学界で大きな議論をよんだ

が、これまで鉄器を曲げる風習も、造墓集団の変化を示す根拠としてあげられてきた⁽²⁶⁾。ただし、大勢としては集団の変化によるのではなく、埋葬儀礼の変化のなかで理解しようとする傾向がつよい⁽²⁷⁾。その後、4世紀中半から末頃にかけて築造されたとされる龍院里古墳105号土墳墓でも、曲げられた鉄器が出土しており、韓国におけるこのような鉄器を曲げる習俗の検討には新たな展開が予想される。

いっぽう、土器を人為的に打ち欠いて埋納する例は、朝鮮三国時代のみならず、日本においてもみられ、その中で須恵器を打ち欠いて埋納するに事例に関しては、すでに注目されている⁽²⁸⁾。これらを含めて、日本列島における同様の習俗が朝鮮半島から伝播したかどうかについては、今後、検討すべき課題であるが、曲げられた鉄器にふれた議論のなかで取り上げられることは寡聞にして知らない。しかしながら、古墳時代に平行する朝鮮三国時代と、さらにこれに先行する中国東北部においては、土器を打ち欠いて埋納することと同様に鉄器を曲げて、墳墓に埋納する事例が知られていることを改めて確認しておきたい。

また、鉄器を折り曲げて埋納する行為そのものの意味については、実用の道具でなくすることにあるとする見解⁽²⁹⁾や、すでにふれたように道教の影響であるとする見方がある⁽³⁰⁾。また、折り曲げた鉄器が同一墳墓に複数個体埋納されることに着目して、異常死と関連する葬送行為とする見解もある⁽³¹⁾。いっぽうでは、材質の観点から、焼入れがされていないか、低炭素鋼である可能性を指摘し、このような鉄器が製作時点から折り曲げることを念頭においていたこととする示唆もある⁽³²⁾。

ただし、従前の所論には、朝鮮三国時代や中国東北部の同種の折り曲げられた鉄器はほとんど考慮されておらず⁽³³⁾、それらを含めて再検討する必要がある。加えて、かつて指摘したように日本の古墳時代に特徴的であると考えられてきた土錘・鉄製ヤスをはじめとした漁具の副葬が、朝鮮三国時代の墳墓でも行われていることがわかってきた⁽³⁴⁾。

鉄器を折り曲げて埋納する習俗に道教の影響を想定する場合には、同時代の墳墓の埋葬習俗および折り曲げた鉄器を埋納した墳墓そのものに、それ以外の道教的な要素が確実ではない。筆者は古墳時代後期を中心として、雲母を埋納する古墳があることを指摘し、新羅や中国漢代から北朝の墳墓の同様な雲母出土例と同時期の道教関係の文献の記載とを論拠として、このような習俗が道教的信仰によることを証したことがある⁽³⁵⁾。鉄器を折り曲げる行為については、今のところこのような属性の異なる複数の同時代資料による相互検証は難しい。

最後に今後の検討に資すべく、このように鉄器を折り曲げて埋納する行為が、東アジアのなかでも、弥生時代後期から古墳時代にかけての日本と朝鮮三国時代の墳墓および中国東北地域の墳墓に共通する行為であることを改めて確認したい。そして、政治および社会の状況が異なる地域と時代において、同様の行為が行われていることから、筆者は、それが時空を超えた信仰などに基づく精神的な習俗であることを示していると考えられる。

このような見方をする上で参考となるのは平安時代の経塚にも、鉄刀などを折り曲げて埋納

する事例があることが知られていることである⁽³⁶⁾。仏教における信仰行為として、古墳時代の事例と比較、検討することによって、行為としての共通性と内在する思惟の違いが顕在化すると思われるが、今後の課題である。

向後は朝鮮半島三国時代の同種資料の蓄積にも注目しながら、日本列島内において、未だ詳細の不明な資料に目を向けていくことによって、この種の資料に対する一層の検討を期し、さらには古代の東アジアにおける葬送習俗に接近することから、地域交渉や精神習俗の相関的な研究にいたるまでの問題を闡明する糸口が見出せよう。

〔注〕

- (1) 堅田直・白石太一郎「京都府西山第1、第2、第5号墳発掘調査概報」『先史学研究』4、1962年
- (2) 堅田直・白石太一郎「京都府西山第1、第2、第5号墳発掘調査概報」(前掲)
- (3) 石野博信「総論」『古墳時代の研究3』雄山閣出版、1991年
- (4) 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ〈松尾頭地区〉』、2000年
- (5) 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室編『道上第2・3・5号古墳、門前2号遺跡：ローツェ株式会社本社拡張工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書6集)、2004年
- (6) 佐々木隆彦「折り曲げた副葬鉄器」『九州歴史資料館研究論集』23、1998年
- (7) 長谷川達「剣を折る・鏡を割る」両丹考古学研究会・但馬考古学研究会編『北近畿の考古学』、2001年
- (8) 弥栄町教育委員会『大田南古墳群—大田南2・3号墳、矢田城跡発掘調査概要—』(京都府弥栄町文化財調査報告第7集)1991年
- (9) 清家章「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」『待兼山論叢』36、2002年
- (10) 田中謙「笠置峠古墳の鉄製品について—折り曲げ鉄器を中心として—」愛媛大学考古学研究室編『前期古墳の副葬品と地域間関係』、2003年
- (11) 慶星大学校博物館『金海大成洞古墳群Ⅰ』、2000年*
- (12) 公州大学校博物館・天安温泉開発・高麗建設『龍院里古墳群』、2000年*
- (13) 韓国文化広報部文化財管理局『天馬塚—慶州皇南洞第155号古墳発掘調査報告書—』韓国文化財普及協会、1975年
- (14) 韓国文化広報部『慶州皇吾里第1・33号 皇南里第151号古墳発掘調査報告書』(文化財管理局古跡調査報告第2冊)、1969年*
- (15) 韓国文化財管理局『北墳発掘調査報告書』、1985年*
- (16) 浅岡俊夫「韓国古墳副葬品の脚台打ち欠き祭祀」『立命館考古学論集』II、立命館大学考古学研究室、2001年
- (17) 浅岡俊夫「韓国古墳副葬品の脚台打ち欠き祭祀」(前掲)
- (18) 韓神大学校博物館『風納土城IV—慶堂地区9号遺構に対する発掘報告—』2004年*
- (19) 権五栄「総合考察」『風納土城IV』(前掲)
- (20) 韓国文化広報部『慶州地区古墳発掘調査報告書第一集』韓国文化財普及協会、1976年
- (21) 尹世英「古墳に副葬された土器の一考察」『三仏金元龍教授停年退任紀念論叢—考古学篇』一志社、1987年*
- (22) 吉林省文物考古研究所『榆樹老河深』文物出版社、1987年*
- (23) 張英「從考古学看我国東北古代民族“毀器”習俗」『北方文物』1990—3*

- (24) 宮川渉「百舌鳥大塚山古墳出土の「鉤状武器」についての覚書き」『藤井克巳氏追悼論文集』同書刊行会、1997年
- (25) 慶星大学校博物館『金海大成洞古墳群Ⅰ』（前掲）
- (26) 申敬澈「金海礼安里160号墳について」『伽耶考古学論集』1、1992年*
申敬澈「加耶成立前後の諸問題」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社、1993年
慶星大学校博物館『金海大成洞古墳群Ⅰ』（前掲）など。
- (27) たとえば加耶史政策研究委員会編『加耶史研究論文要約集』釜山大学校韓民族文化研究所、2004年 とくに金世基「墓制から見た加耶社会」など。
- (28) 浅岡俊夫「須恵器の口縁部・脚台部の打ち欠き儀礼－弥生農村からの土俗的祭祀の予察－」『田辺昭三先生古稀記念論文集』、2002年
- (29) 佐々木隆彦「折り曲げた副葬鉄器」（前掲）
- (30) 清家章「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」（前掲）
- (31) 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室編『道上第2・3・5号古墳、門前2号遺跡』（前掲）、p.p.111-112
- (32) 村上恭通『倭人と鉄の考古学』青木書店、1999年、p.p.117-118
- (33) わずかに清家章氏が注記の中で朝鮮三国時代の4例をあげて、鉄器を折り曲げる習俗が朝鮮半島から伝播した可能性を示唆している。ここであげられた4例については、土圧によって曲がった例を含む可能性があり、本論では人為的に曲げられたことが確実な例のみについて、考察を及ぼした。
清家章「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」（前掲）
- (34) 門田誠一「朝鮮三国時代における漁具出土の墳墓－古墳出土漁具との対照検討をかねて－」『文化学年報』48、1999年
- (35) 門田誠一「古墳出土の雲母片に関する基礎的考察－東アジアにおける相関的理解と道教思想の残映－」『鷹陵史学』25、1999年
門田誠一「湯山古墳出土の雲母片と関連試料の再吟味」『古代学研究』150、2000年
- (36) 井口喜晴「折り曲げられた鉄刀を伴出する経塚遺物」『鹿園雑集』1、1999年

（末尾に*を付した文献は外国文）

〔付記〕

本論は平成15年度佛教大学一般研修（4月1日～9月30日）および国内研修（10月1日～平成16年3月31日：受入機関・同志社大学歴史資料館）の研修成果の一部である。とくに本論の前半でふれた資料については国内研修の受入先であった同志社大学歴史資料館における資料の観察・熟覧によっている。また、韓国等における類例の実見については、一般研修における各地所蔵・展示機関等での知見によるところが大きい。研修期間に資料や文献調査で便宜を図っていただいた諸機関に謝意を表したい。

（もんた せいいち 人文学科）

2005年10月19日受理